

# 低学年児童を対象とした路上犯罪防止のための 実践的教材の開発

中 迫 由 実<sup>\*1</sup>・金 崎 ひかる<sup>\*2</sup>

Practice for Prevention of crime on the street  
for lower grades of elementary school

Yumi NAKASAKO and Hikaru KANAZAKI

## 【本文要旨】

本報は、声かけ事案や犯罪被害に遭うことが多い小学校低学年を対象とした防犯教育の教材開発を行い、開発した教材に基づく実践の内容、結果を報告するものである。教材開発にあたっては、児童自らが考え体験を通じて危険時に適切な判断ができる力を身につけさせることを主眼とした。開発した教材に基づき、熊本市の児童育成クラブで実践を行い、教材の効果と課題を把握、分析した。

## 1. 研究の背景及び目的

子どもが被害者となる犯罪は、国レベル、地域レベルで対策が強化されているもののいまだ後を絶たない。地域では子どもの見守りなど地域住民により子どもを犯罪から守る取り組みが積極的に行われているが「子どもを守る」取り組みだけではなく、より実効性を高める観点から、子ども自身が危機回避能力を高め、自分自身を守る力を身に付ける取り組みが望まれる。

わが国では、平成21年、学校保健と学校安全の一層の充実を図るために、従来の学校保健法に学校安全の要素を加えた学校保健安全法が制定された。また、平成27年3月に改定された学習指導要領総則において、新たに安全に関する事項が規定されるなど、学校教育において安全教育はますます重要度が増している。

一方、現状における小学校での安全教育は、避難訓練や「いかのおすし」の標語による指導や警察の講話などを中心として行われているが、安全教育の負の側面として、大人からの「声かけ」に対する過剰な注意喚起などが原因で、相手を思いやった行動をとることや地域の大人とコミュニケーションを取ることが子ども自身が恐れてしまうことが懸念されている。また、対症療法的な教育にとどまることなく、状況に応じて子どもが自ら考え行動する能力を

身に付けることが必要と考える。

本稿は、声かけ事案や犯罪被害に遭うことが多い小学校低学年を対象とした防犯教育の教材開発を行い、開発した教材に基づく実践の内容、結果を報告するものである。教材開発にあたっては、児童自らが考え体験を通じて危険時に適切な判断ができる力を身につけさせることを主眼とした。開発した教材に基づき、熊本市の児童育成クラブで実践を行い、教材の効果と課題を把握、分析した。

## 2. 授業実践の構想と概要

平成22年3月には、学校安全参考資料「『生きる力』をはぐくむ学校での安全教育」が作成され、危険予測の演習や視聴覚教材、ロールプレイングを活用した安全教育を行うことが効果的であるとしている。

そこで、全国の学校・地域等で行われている防犯に関する取り組みをふまえ、児童が自ら考え、主体的に参加し体験的に学習できる45分程度の防犯教育の展開指導案を作成した。次に、平成27年11月の土曜日に3回にわたって熊本市の児童育成クラブ3ヶ所で教材の実践は4年生の小学校教員志望の学生が行い、ワークシート、事前・事後アンケートの記述から評価を行った。なお、児童の内訳は、男子21名、女子24名、学年は1年22名、2年14名、3年9名の計45名である。授業実践においては、かつての被害経験のある児童の確認を行い、また学童保育の指導者を通じて保護者への周知を徹底して行った。実践後も登下校に不安を抱く児童がいないか一定の期間配慮を行った。

\*1 熊本大学教育学部

\*2 熊本県立菊池少年自然の家

### 3. 教材について

#### 3.1 教材開発の目的

今回の実践に使用した教材は、「安全に帰ること」の意義を理解させるとともに、ロールプレイングを通じて、「知らない人に声をかけられたとき自らが考えて行動すること」を疑似体験することで、児童自身が自らの身を守る能力の向上を図ることを目的として作成した。

#### 3.2 到達目標

児童の犯罪被害を防止するための行動の基本的な指針として、「知らない人からの誘いをはっきり断ること」、「極力単独で行動しないこと」、「被害に遭いそうになったら助けを求めること」を習得することを目標とした。

声かけ事案等の多くが、「お菓子をあげるよ」「車で送ってあげる」など言葉巧みに児童を誘いこむこ

と、多くの声かけ事案は、子どもが1人の時に発生していること、自身の被害防止に加え、次の被害を防止するために大人への「報告」が不可欠であることから、最低限子どもが認識しておくべきものとして3つの行動指針の習得を設定したものである。

#### 3.3 授業の流れ

導入では、学校から帰宅して楽しみにしていることは何かを思い浮かべさせ、各自発表させることで、安全に帰宅することの意味に改めて気づかせ、児童の興味を喚起した。展開では、授業者がペープサートを提示し、ペープサートの台本の台詞を、安全に帰ることのできるものを書き直させた。そして、書き直した台本で児童に2人1組でロールプレイングをさせた。まとめでは、大声を出す練習や、授業のポイントである「帰り道の約束」の復習をして、知識と体験がつながる学習にした。授業展開案を表1に示す。

表1 授業展開案

学習過程	学習活動	配当	指導上の留意点
導入	1 複数人で下校する設定のペープサートを見る。	10分	○ペープサートから、登場人物が遭遇しうる危険や良かった点について考えさせる。 ○ペープサート劇のあらすじを書いた模造紙を提示し、児童が物語をふりかえりやすいようにする。
活動①	2 1人で下校する設定のペープサートを見て、主人公が安全に帰宅するための方法を考える。	10分	○複数人で下校するペープサートと比較させ、はっきりと誘いを断ることや友達と帰ることの大切さを実感させる。 ○児童の発言にあわせて、「帰り道の約束」を提示する。
活動②	3 台本を書き直し、2人1組でロールプレイングを実践する。	20分	○せりふの中で、主人公が安全に帰るために書き直したほうが良い箇所を、ワークシートに書き直させる。 ○そのままのせりふで良い箇所には、枠に丸を記入させるよう指示する。 ○書き直した箇所を理由とともに順番に尋ね、あいさつや人に親切にすることの大切さに気づかせる。 ○2人1組でロールプレイングを実施させる。
まとめ	4 本時の学習をふりかえる。 (1) 帰り道の約束の復習 (2) 大声を出す練習 (3) 感想記入 <帰るときの約束> ・知らないひとのさそいは、はっきりとことわる ・おとなの人に知らせる。 ・ともだちと一緒に帰る。	10分	○「帰り道の約束」を一斉に読ませ、定着させる。 ○防犯ブザーの使い方の確認と大声を出す練習を実践させ、危険時の対処法を身に付けさせるとともに、実践することで児童の学習意欲を引き出す。 ○本時の学習で学んだことや感想をワークシート設問二に記入させる。 ○学習を通して、登下校に不安を感じてしまった児童に配慮し、全体に声かけをする。

### 3.4 教材で取り入れた活動及び教具について

#### (1)授業の流れを示したボード

児童が学習の流れを把握しやすくなるよう、内容を「見る・考える・やってみる」の3つにまとめ、ボードに示し、常に提示することで児童が学習の流れを随時確認できるよう工夫した。実践では、児童たちはこのボードを見て、学習に興味を示すなど、興味を喚起する効果がみられた。

#### (2)ペープサート

児童の興味を喚起するとともに、自ら考えるためのツールとしてペープサートを使用した。複数の児童で帰宅する場合と1人で帰宅する場合とで、不審者と遭遇した際の対応が異なることを体験的に感じさせることで、極力単独で行動しないことに対する理解を補助することを目的としたものである。ペープサートのストーリーは、ニュースや全国の県警のホームページを参考に、よくある声かけ事案の中から、不審者が「車に乗せようとする」「お菓子をあげるといって誘いこむ」といった設定にし、台詞は、児童が集中しやすいようなるべく短く設定した(写真1)。



写真1 ペープサートの様子

#### (3)フラッシュカード

授業では、到達目標とした3つの行動指針を標語化した「帰り道の約束」をフラッシュカードに提示した。

#### (4)ロールプレイング

児童自身が考える場面として、ロールプレイングを実施した。2人1組のロールプレイングを行ったが、自身がロールプレイングを実施するだけでなく、他のグループのロールプレイングを見る場面も設定した。他のグループのロールプレイングを見ることで、客観的に問題点に気づき、児童同士の交流を促すことで、より高い学習効果をねらったものである(写真2)。



写真2 ロールプレイングの様子

#### (5)台詞の書きかえ

ロールプレイングに加えて、児童自身が考える場面として「台詞の書きかえ」を実施した。主人公のはなこが、知らないおじさんに話しけられ断ることができず連れて行かれる台本を、はなこが安全に帰宅できる台本になるように、台詞をワークシートに書きかえさせた。書きかえた方がいいと思ったはこの台詞は、ワークシートの枠内に書き込ませた。また、書きかえなくてもいいと思った台詞は枠内に○を書くよう指示した。適切な行動の定着だけでなく、状況に応じた適切なやりとりを児童自身が考える、より応用面を意識した実践として設定した。

#### (6)ワークシート

台本を書き直す学習活動では、ワークシートを使用した(写真3)。書くことで、児童が考えたことを可視化し、児童の考察をより深めるとともに、到達度を図ることがねらいである。

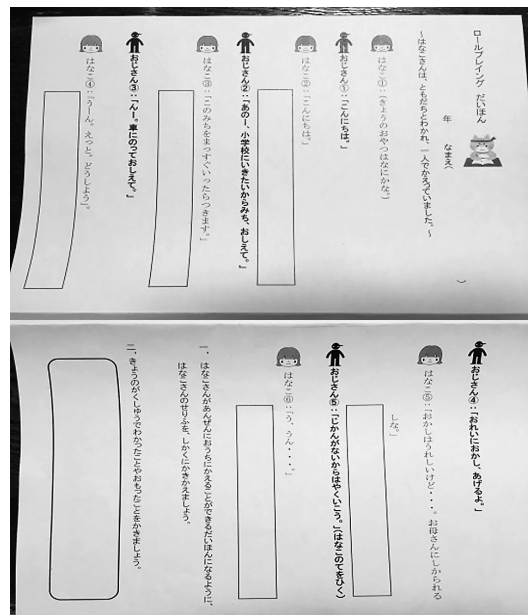


写真3 ワークシート



台詞のねらいは以下の通りである。

はなこ②③の台詞では、「あいさつの大切さ」や道をその場で教えてあげるといった相手を思いやった行動をとることの大切さ、はなこ④の台詞では、あいまいな返事をするのではなく、知らない人の誘いははっきりと断ることの大切さの理解をねらった。また、はなこ⑤⑥の台詞ではあいまいな返事をする事で相手がしつこく誘ってきて、断りにくくなり、手を引かれて付いていってしまう様子を示すことから、知らない人の誘いははっきり断ることや、いざとなったら防犯ブザーや大声を出して助けを求めることを教え、強引な手口にも対応できる危険回避能力を育成することをねらったものである(表2)。

表2 台本の台詞

はなこ①:(きょうのおやつはなになな。) おじさん①:「こんにちは。」 はなこ②:「こんにちは。」 おじさん②:「あの一、小学校にいきたいからみち、おしえて。」 はなこ③:「このみちをまっすぐいったらつきます。」 おじさん③:「んー。車にのっておしえて。」 はなこ④:「うーん。えっと。どうしよう。」 おじさん④:「おれいにおかし、あげるよ。」 はなこ⑤:「おかしはうれしいけど…。お母さんにしかられるしな。」 おじさん⑤:「じかんがないからはやくいこう。」(はなここのてをひく) はなこ⑥:「う、うん…。」
--

### 3.5 ワークシート、事前・事後アンケートの評価について

児童の到達度を、ワークシートおよび事前・事後アンケートにより評価した。評価対象は、授業の最後にワークシートに記入した、「学習で分かったこと」の記述と、事前・事後アンケートの「帰り道、大人の人に道を聞かれたらどうするか」の記述の変化を分析した。

## 4. ワークシート及び事前・事後アンケートの分析

### 4.1 ワークシートの分析

はなこ②の台詞では、挨拶への返答については、ほとんどの児童が挨拶を返していることを肯定していたが、1年生では「助けて」、「無視・いきなり断る」といった回答をする児童も見られた。知らない人から声をかけられることに対して恐怖心を抱いていることを示していた。台詞③では不審者へ道を教えるやり取りであるが、このやり取りを肯定する児童は2年、3年生で多いが、1年生では肯定が7人に対して「断る」、「無視」の回答が12人と回答が最も多く、不審者への警戒心は強い。はなこがあいま

いな返事をする台詞④、⑤、⑥の台詞の書きかえを学年別にみると、どの書きかえにおいても3学年とも「断る」の回答が多く、「帰り道の約束」の定着が見られた。しかし、「○」の回答が1年生に多いことから、「知らない人の誘いははっきりとことわる」ことの定着の必要性は依然として高いものと考えられる。また⑤の書きかえでは「さきにお菓子をちょうだい」などの非現実的な回答が低学年にみられ、低学年への実践の意義が存在するものと考えられる。⑥の書きかえの「断る」の回答に分類した記述をみると、1年生は「いやだ」と言って断る回答が、2、3年生になると「お母さんがしんばいするのでいけません」などと理由をつけて断る回答が見られた。台詞⑥は不審者から手を引かれる設定になっているため「断る」という記述となったが、⑤の段階で「お菓子をあげる」という誘いに対して肯定している回答が1年生で4件の回答があり、1年生の中には状況の判断が難しい児童もいることが確認できた。

### 4.2 ワークシートの評価

学習の最後に記入させた「学習で分かったこと」の記述の評価を分析した。得点の高い回答では知らない人の誘いははっきり断ることやブザーを鳴らして誰かに知らせるといった「帰り道の約束」を踏まえたものが多く、単に標語を覚えるだけでなく、ロールプレイングを実践したことにより、高い学習効果につながったものと推察される。また、「防犯ブザーをならすこと」などの回答も多く見られたことからイラスト教材による視覚的な効果があったのではないかと考えられる。

### 4.3 事後アンケートの分析

課題に対する理解度を自己評価してもらったところ、「できなかった」とする回答は全学年23人中(3クラブのうち2クラブの児童が対象の設問)1人で、ほとんどが「うまくできた」、「まあまあできた」と回答した。ロールプレイングについての自己評価も各学年とも高く概ね好評であったといえる。「今日勉強したことを他の人に話したいと思うか」たずねたところ、「はい」と回答した児童がどの学年でも最も多く、実践により児童の興味を喚起する効果がみられた。一方、「新しく知った内容はありますか」と自由記述でたずねたところ、2年、3年では一部に学習内容を記述しているものも見られたが、「ない」や「全部知っていた」と回答する児童が多く、学習経験を重ねている学年には物足りなかったかもしれず、複数の学年で学習する際には内容に工夫が必要との課題を認識した。しかし、1年生では、実践で伝えた内容についての記述も多数みられ一定の学習効果が見られたものと思われる。

学習内容を受けて実践への自信について、「知らない人に声をかけられたら、今日勉強したことをできそうか」尋ねたところ、「できると思う」は全体で45人中25人と半数以上であり、3校とも1年生ではこの回答が最も多く、一定の学習効果がみられた。一方で「わからない」と回答したのは12人でありうち女子が8人であった。自信が持てないとした背景については、児童への聞き取りを行うことで、さらに教材の改善を図っていく必要がある。

#### 4.4 事前・事後調査の比較による評価

事前・事後調査で同じ問いを立て、「知らない人から声をかけられたときどうするか」の記述から児童の学習後の変化を見ると、事前調査では「教えない」や「無視をする」と回答した児童が、事後調査では「教えるけど一緒に行かない」や「その場で教える」と記述しており、コミュニケーションを遮断することなく自分の身の安全を確保し、はっきり断ることが記述しており効果がみられた。また、事後調査で「近くの人に知らせる」や「防犯ブザーを鳴らす」「はっきり断る」といった記述が見られ、到達目標の達成に一定の学習効果がみられた。

#### 4.5 考察

導入では、興味を喚起するため、児童が帰宅後楽しみにしていることを想起させたが、どの児童も元気よく発表し、安全に帰宅することの意味について改めて確認することができた。家で児童が安全に返ってくることを保護者が待っていることも含め、安全に帰ること、何があっても生きて家に帰ることの意味について短い時間であったが考えさせることができた。

ペープサートでは、児童は、身を乗り出して、真剣に見ており、興味・関心や学習への意欲を引き出すことができたと考えられる。また、3人で下校する場合と1人で下校する場合のペープサートを比較させたことで、児童は、学習のポイントに気づくことができた。

台本の書き換え活動では、状況に応じて適切な対応ができるようなやりとりを考えることができ、児童同士のロールプレイングや大声を出す練習では、役になりきる姿や積極的に活動に参加する姿が見られたことから、これらの活動は、児童の主体的な学習として効果的であったと考えられる。特に1年生の児童では記述や表現が思うようにできない児童もおり、学童クラブの指導者のサポートが必要なケースもあったが、3年生では概ね理解ができていたため、学童クラブのような異学年が混在している教室で行うには、指導補助者が必要となる教材であった。記述量が多い点は、今後難易度を下げることが検討

する必要がある。時間配分という点からも、ペープサートを省略し、台詞の書き換えにさらに時間を配分することも検討可能である。

ロールプレイングで、実際の場面を想定してやり取りの練習ができることは児童にとって有効であると考えられる。学校現場での防犯教室では、代表の児童が不審者役の大人とやり取りをすることが多く、児童と児童でのロールプレイングは実際の想定に比して臨場感が乏しいところはあるものの、実際に不審者に遭遇した場合の対応パターンを習得でき対処へとつなげることが可能である。

## 5. まとめ

今回の実践においては、児童の興味を喚起するとともに、ロールプレイング、台詞の書き換えなどの作業により、児童が自ら対応を考え行動する能力を育てるという到達目標に対し、一定の効果がみられた。

一方、問題点として「記述をする」活動が多かったため、児童の集中力が持続しない、との課題がみられた。台詞を書き換える作業などについては、作業内容を減らしたワークシートを適用するなど、児童の発達に合わせた配慮が必要であると考えられる。

また、学習効果の評価方法の観点から、低学年を対象とした場合には、記述の内容により評価することは困難であるとの課題も明らかとなった。今後、ロールプレイングなどの活動の中での評価など、児童の発達段階に合わせた評価方法を検討する必要がある。

今回の教材と従来の防犯教育を比較することで、教材の学習効果を高める方法や検討課題が明らかになると考える。今回の教材は、知らない大人からの声かけに対する対応を児童自身が考えることをメインにした防犯教育の教材であったが、今後、突然連れ去られる場合の対処方法や相手との距離の取り方など、技術面を重視した教材についてもあわせて必要であると考えられる。

## 謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただいた熊本市健康福祉子ども局青少年育成課井上雅弘様、実践にご協力頂きました、熊本市立向山小学校児童育成クラブ、若葉小学校児童育成クラブ、高平台児童育成クラブの指導員の皆様、児童の皆様に、厚く御礼申し上げます。

本研究は平成26年度科学研究費若手(B)(研究代表者：中迫由実)により行ったものです。

## 参考文献

- 1) 「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育 準拠, わたしたちのあんぜん チャオ, 教育出版
- 2) 学校安全参考資料 「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育 文部科学省
- 3) 宮田美恵子: 児童の防犯能力に関する研究—小学1年生における防犯指導効果の経年考察, 安全教育学研究第14巻 第1号, pp. 39-46, 2014.
- 4) 豊沢純子, 藤田大輔: 児童はどのように犯罪者と要援助者を区別しているか—小学校3年生児童を対象とした検討—, 安全教育学研究第12巻, 第1号, pp. 15-20, 2012
- 5) 大谷亮, 橋本博, 小林隆, 岡田和未, 岡野玲子: 高学年児童を対象にした交通安全教育—役割演技法を用いることによる主体的な学習の可能性について—, 安全教育学研究第11巻, 第1号, pp. 7-24, 2011
- 6) 小川和久: 子どもへの交通教育—効果的な教育プログラムと支援システム—, シリーズ 21世紀の社会心理学10 交通行動の社会心理学, 北大路書房, pp. 112-121, 2000
- 7) 宮田美恵子: 0歳からの子どもの安全教育論—家庭・地域・学校で育む“しみん・あんぜん力”—, 明石書店, 2010